

Title	編輯を終へて
Author(s)	山本, 檜信
Citation	懐徳. 1936, 14, p. 89-90
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88968">https://hdl.handle.net/11094/88968</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 編輯を終へて

幹事 山本檜信記

電光石火の如く形勢變ずといふ言葉があるが、毎朝目覺める毎に住んでゐる世界が變つてゐる、といつても過言でないほど目まぐるしく變化する世界に生活する我々は、各自その精神をしつかり擱まへ失つてはならないといはれてゐるのであるが、一體かゝる精神とは何であるか、明治天皇の御諭し給へる古今に通じて謬らず中外に施して悖らざる精神であつて、其の根本は君に忠、親に孝たる精神に外ならない。狩野先生の孝治の話は、我々の爲めに特に御講演下さつた筆記であつて我が國體の精華たる此の精神を説き給ふこと懇切を極めてゐる。一言

一句も忽がせにせず御熱讀下さつて、確乎不動の國民精神を培養せられたい。國家にありては至尊陛下に對し奉りて忠臣たることを、家庭にありては兩親に仕へて孝子たることを根據にして生活すれば、自然に正道を脱線することなく、平和の樂土建設の使命が達せられるのであつて、君臣父子の人倫こそ理窟を超絶せる人間自然の情に基く道徳の大本でなければならぬ。中正の道を失して或は左傾し或は右傾し民苦しみて國危きは、歐洲の縮圖といはれるスペインがこれを證して餘すところがない。浮華輕佻を去り、質實剛健の風を養ひ上に 聖天子を戴き、萬民その生を樂しみ、一旦緩急あれば死を恐れずして從容國難に殉じ、天下に皇國の規範を示すが、我が民族の使命であると信ず

る。

最近、大言海編纂の業を成就せられた新村先生の本堂記念講演筆記、源先生の温泉寺と應舉寺、岡山先生の書道に關する御高話に加ふるに、吉田先生の懷德堂二十周年回顧談を以てした。編輯者の微衷を酌み取り、會員諸兄が研鑽の指針にされたい。

三回に亘り附録とせる懷德堂舊記は、本號を以て完結する。舊懷德堂の貴重なる資料として保存せられたい。次號よりは本堂書庫珍藏の未刊本中より適宜御選擇願つて附録としたいと計畫してゐる。會員諸兄より寄稿せられた詩文の一部を編輯の都合上割愛せるものあり、御寛恕を乞ふ。

故碩園西村先生の遺稿を岡山、吉田兩先生が

編輯せられて、本堂重建二十周年記念として出版されることとなつた。故先生を敬慕すること深き我々聽講生の喜びこれに如くものはない。故先生の靈も定めし悦んでゐられることと拜察する。恒例によりて頒たる、扇子は萬年・碩園兩先生の御筆蹟であつて是れ又好個の記念である。

十年後の三十周年を目標として、我々會員はいよ／＼修養に修養を累ね、向上伸展して已まぬ我が國運に微力を致し、以て宏大なる 聖澤の萬一に報い奉らねばならない。

毎年炎天の折柄編輯の勞を惜まれない藤塚・酒井兩兄があつて、始めて本誌が刊行されるのである、此の點深く感謝する。